

100年 先を読む

23

ダイバーシティから インクルージョンへの 飛躍

出遅れている 日本のダイバーシティ

農業女子、林業女子、狩猟女子など、これまで男性の仕事と理解されてきた分野で女性が活躍することが話題になり、刀剣女子、相撲女子、古墳女子など趣味の分野でも女性の進出が顕著になっている。この背景には仕事の分野での人手不足解消とか、趣味の分野での客層拡大という目先の思惑だけではなく、これまで社会に存在していた男女という性差を解消しようという世界規模の潮流があり、さらに背後に存在するのが“多様”という概念である。

この概念が顕著かつ重要な分野は地球の生物世界である。極寒の海中、灼熱の砂漠、暗黒の地中など、地球のあらゆる環境に多種多様な生物が棲息し、その種類は何百万種にもなると推定されている。これらの生物は孤立することなく、動物の排出する炭酸ガスは植物に吸収されて動物が必要とする酸素に転換するように、相互に影響し合っている。それら多様な生物の密接な関係の恩恵によって、数百万種の一種でしかない人類の生存が何百万年も保証されてきたのである。

ところが人間の構築した社会は人種、国籍、性別、宗教、思想など、生物としては微々たる差異でしかない特徴を理由に差別し、極端な場合には相互に憎悪し排斥さえしてきた。それを見直そうという動向がダイバーシティ(多様)であり、最初は学校教育から出発し、次第に企業活動や地域社会にまで影響が拡大してきた。日本では政府が

「ダイバーシティ2.0」という政策を策定し、女性の活躍や国籍の多様を推進しているが、それは日本が後進国家であることを証明している。

女性の活躍の出遅れを明示するのは国会議員の女性比率で、世界の平均が24%であるのに日本は10%でしかなく、世界の165位。さまざまな指標を統合した男女平等指標も121位が現状である。国籍の多様についても、外国人労働者の雇用比率はアジアの国々が10%以上であるのに、日本は1%程度でしかないし、外国人留学生の受け入れ比



率も、訪米諸国が10%以上であるのに、日本は3%程度でしかない。多様の欠如が際立った国家である。

登場した挽回のための インクルージョン

しかし、日本が出遅れた現状を挽回する絶好の機会を提供する概念が登場してきた。多様な人々で構成される組織が実現したとして、それによって国家や企業や学校などの活動が活発になっているかが疑問とされる状態を変革しようという活動である。一定割合の女性を雇用しても、依然として書類の複写など単純作業に従事させ、外国の人々を雇用しても通訳として利用しているだけでは、多様の本来の機能は実現していないのではないか、という疑問への対応である。

それがインクルージョンである。これは包含と包摂と翻訳されるが、多様な要素が相互に影響し、全体として効果を発揮する組織になるという概念である。生物世界では、あらゆる生物が相互に密接に関係し、全体を安定して持続可能な世界

にしているように、企業や社会においても多様な人々が相互に連携して組織の能力を向上させようという理念である。企業の場合、社員の人数の単純な加算ではなく、掛算にしていこうということになる。

残念ながら、現状では日本のインクルージョンは世界で出遅れている。最近の24か国の企業を対象にした調査で24位である。しかし、日本にはインクルージョンの伝統がある。日本の言葉は古代に中国から渡来した漢字を固有の言葉と融合させ、文字も漢字を利用して仮名文字を創造した。明治時代に欧米の言葉が大量に流入したときも、アートを芸術、サイエンスを科学などと翻訳し、日本の文化に融合させた。ダイバーシティではなく、見事なインクルージョンである。

さらに日本にインクルージョンの素地があることを証明したのが、昨年、日本で開催されたラグビーのワールドカップである。半分が外国の選手である日本チームは、ワンチームを標榜して国籍を融合した強力なチームを結成し、見事に予選を突破した。

幸運なことにインクルージョンは小型の組織ほど実現が容易である。中小企業はダイバーシティを省略して一気にインクルージョンをめざせば、人数の掛算になる推力を獲得できるはずである。



東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男
Tsukio Yoshio

昭和17(1942)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に「幸福実感社会への転進」(モラロジー研究所)、「転換日本」(東京大学出版会)ほか多数。